

「人間主義の行動準則」

——池田大作の SGI 提言における対話の規範の一考察——

山 田 竜 作

はじめに

本稿の目的は、池田大作が2005年1月の『SGIの日』記念提言（以下、「SGI提言」と記す）で提唱した「人間主義の行動準則」（以下、「行動準則」と記す）を検討し、分断を結合へと転換させゆく対話に求められる規範の一端を明らかにすることである。

その「行動準則」とは以下の通りである（池田2005（上）：3面）。

「全ては変化——相互依存（縁起）し合っており、調和や全一性はもとよりのこと、矛盾や対立といえども、結びつきの一つの現れである。故に、矛盾、対立の内なる制覇に発する、悪との戦いは、大きな結びつきに至るまでの避けられぬ、避けてはならぬ^{けいきよく}荆棘である」

この非常に短い文章の中に池田の思想の多くが凝縮されており、安易な解釈を許さない。2005年はSGI（創価学会インタナショナル）発足より30周年という年であり、また2001年「9・11」テロ以降、セキュリティの名における軍拡への傾向性や人権の制限などが憂慮される中、池田はいかなる冷笑を浴びようとあくまで「対話こそ平和の王道」と叫びぬかなければならないと主張した。そのような文脈で提唱された「行動準則」は、さらなる分断と暴力の応酬が進み20世紀後半の世界的民主化に対する逆行とさえ見える2020年代の現代世界においてこそ、再検討されるべきものと筆者は考える。

その際、問われるべきは、池田の「人間主義」とはいかなるものであり、なぜその根幹に「対話」がなければならないのか、またそこで考えられている「対話」とはいかなるものか、といういささか大きな問題である。もとより限られた紙幅の中で、対話や人間主義に関する池田の思想の全体像を明らかにすることは不可能であるが、以上の問いへのアプローチとして、本稿では「行動準則」を主に次の3つの論点から検討する。第1に、「すべては変化し相互依存し合っている」という視点につながるであろう池田の「善悪二元論」批判である。第2に、「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」とする池田の対話観である。第3に、池田が示す「内なる制覇に発する悪と

の戦い」が、対話において意味することについてである。最後に、池田の提唱する「行動準則」が直ちに何らかの結果を出そうとする対症療法であるよりも、むしろ無限に続けられるべき抜本療法であることを示したい。なお、以上の議論のため、2005 年前後の SGI 提言や、池田の海外大学講演等も適宜参照することとする¹。

1. 予備的考察

さて、「行動準則」それ自体の検討に入る前に、予備的考察として、対話をめぐる池田の議論の前提と考えられるものを3点考えてみたい。

第1に、善の本質は「結合」であり悪の本質は「分断」である、との池田の信念である。これは、1993年のSGI提言で披歴されているが（池田1993a: 1面）、本稿の主たる議論に直接関係する2005年の同提言でも再度言及されており、ここではその信念こそ「人間主義」であり、21世紀に要請される対話の基盤こそがそれであると語られている（池田2005（上）: 1面）。結合を善、分断を悪とする池田の信念は、さまざまな形で論じられており、冷戦後の民族紛争をめぐる文脈で「自」と「他」を分断していく「閉じた心」の指摘はその一例である（池田1993a: 1面）。後に検討する「善悪二元論」批判の前提にあるものが、この池田の信念であることを、まずここで確認しておきたい。

第2に、池田の眼目がどこまでも人間自身の変革にあるという点である。昨今の社会科学において対話に最も関係する議論の1つは、政治学等における熟議民主主義（deliberative democracy）論と考えられる。ユルゲン・ハーバーマスやジョン・ロールズら政治哲学者による「理性の公共的使用」に基づく熟議論は、もはや古典の部類に属すると言える。しかし、特に政治学における熟議民主主義の研究は、合理的な意思決定へとつながる熟議をいかに制度化するかという点に重きが置かれているようであり、熟議をする人間自身のありようには焦点が当てられにくいと考えられる²。それに対して、「人間革命」を唱える池田の目は、制度よりも人間それ自体に徹底して向けられている。もちろん池田は制度の重要性を否定しないが、しかし彼は、人間の外部にあるもの——それが制度であれ何らかのイデオロギーであれ宗教的ドグマであれ——によつ

¹ もちろん、40年にわたるSGI提言を本報告で網羅的に扱うわけではない。

² 熟議民主主義の1つのポイントは、他者との熟議・対話・コミュニケーションを通じて自身の選好が変容するという点と言えるが（cf. Young 2000）、他者の声に耳を傾けようとしない人間、自らの見解や立場に固執する人間をどうするか、という問題は制度論には馴染みにくいであろう。むしろ、熟議民主主義論であまり取り上げられない思想家・理論家——ジョン・デューイ、カール・マンハイム、ハロルド・D・ラスウェルら——の、民主的人間ないし民主的パーソナリティ（およびその育成）という関心の方が、対話する人間をめぐる池田の思想に親和的ではないかと筆者は考える。

て人間が支配される転倒を繰り返し論じている³。人間の内面を、先に触れた「閉じた心」から「開いた心」へと転換させ、対話の回路を縦横無尽に張り巡らせていこうとするのが、池田の根本的な発想であり、また生涯をかけた実践だったと言えよう（池田1993a: 4面）。

第3に、まさに「人間主義」である。2005年提言において、池田はその「行動準則」の前提を「人間主義の結構」として以下の通り3項目に要約している⁴。

- (1)すべての事象は相対的、可変的である。
- (2)ゆえに事象の相対性、可変性を見極めていく眼識を養い、事象の相対性に紛動されない強靱な主体を築くことが欠かせない。
- (3)そうした眼識、主体をベースにするがゆえに、人間主義は、人間である限り、対象を選別しない。イデオロギー、人種、民族によって、人間を「定型化」したり、「限定性」を付与したりして、対話の道を閉ざさない。

そして、以上の人間主義に要請される「眼識」の果てにもたらされるのが、すべての事物が相互に縁となり依存し合いながら生起する多様性に満ちた「縁起」の世界であるというのである（池田2005（上）：3面）。これらの3項目は、本稿の考察対象である「行動準則」の中に編み込まれていると考えられるので、ここで1つ1つ検討することはしないが、すべての事象が可変的であるとの自覚、および人間の属性にとらわれない対話、という点の重要性に注目しておく必要がある⁵。

以上の3点を前提として、「行動準則」そのものの検討へと進んでいきたい。

2. 「行動準則」の検討（1）：「善悪二元論」批判と自己規律

まず着目したいのは、「行動準則」の冒頭での「すべては変化し相互依存（縁起）し合っている」という点である。ここで池田は相互依存を明確に「縁起」と示している。ありとあらゆる物事や事象は単独で存在したり生起することはなく、相互依存の網目の中にあるというのが、仏法者としての池田の「縁起」観であり、前節の最後に触れたように彼の世界観とも言える。ここでは「縁起」観それ自体を検討するというよりも、それと密接に関係すると思われる池田の「善悪二元論」批判を考えてみたい。この点こそ、分断に満ちた現代世界を根源的に捉え直す際に重要と考えら

³ 1990年代の池田の海外講演をいくつか瞥見するだけでも、それは明らかであろう。例として（池田[1991]2000）（池田[1992b]2000）を参照。2005年提言においても、過激主義や教条主義が陥る「イズムの功罪」が語られ、人間の自由な思考や判断を拘束した果てに「イズム」が人間に君臨するという逆倒が指摘されている（池田2005（上）：3面）。

⁴ この3項目は、すでに2002年のSGI提言でそのあらましが語られている（池田2002（2）：2面）。

⁵ なお池田自身、ここでの人間主義が「人間中心主義」でないと断っており、マルティン・ブーバーの『汝と我』と牧口常三郎の『人生地理学』に言及しつつ、人間の伴侶としての自然、および自然と人間との対話について論じている（池田2005（上）：4～5面）。この点についての検討は本稿の射程外だが、現代の地球環境問題を根源的に考える際に不可欠のポイントであろう。また（池田[1993c]2000:29-30）も参照。

れるからである。

池田が繰り返し議論するのは、戦争であれイデオロギー対立であれ民族紛争であれ、「自」と「他」を分断し、他者を「敵」「悪」と見る人間の発想である。特に彼は、「悪」は常に相手側（すなわち外部）にあるとする固定的発想を問題視する。例えば池田は、「悪」というものが常に他人の中に具体化されてしまい、決して自分の中ではないという T・S・エリオットの指摘を参照している（池田 1990: 4 面）。それに対して、「縁起」観に基づく池田の発想からすれば、善と悪は相対的である。これは決して、善も悪もないというニヒリズムではない（池田は「何でもあり」につながる過剰な価値相対主義に与することはない）。そうではなく、「悪」は自分の内部にもあり、「善」は自分の外部にもあるのであり、その意味で善と悪が相対的なものである以上、「敵」や「悪」を固定的に見ることはできないということである。「縁起」観からすれば、自分の内側から「善」の側面が出るか「悪」の側面が出るかは、いかなる縁に触れるかに左右されるのであり、相手の場合もしかりである。そのように見る「眼識」が何よりも要請されるのであり、「自＝善」「他＝悪」という固定的な二元論を克服することが重要な課題となるのである。

その克服の第一歩として池田が主張するのが、まず自分自身の内なる「悪」を見つめる徹底した内省、すなわち「自己規律」である。そしてその「自己規律」に不可欠なのが「他者」、具体的な人間としての「他者」の存在であり、その他者が持つ痛みや苦しみへの想像力こそが「自己規律」につながるというのである。例えば「9・11」テロの翌年 2002 年の SGI 提言では、この点が強調されており、同時多発テロの実行犯の側も、それに報復する側も、こうした痛覚および「自己規律」を欠いているのではないかと指摘している⁶。戦うべき「悪」は、他者の痛みを感じず「自」と「他」を分断しゆく「人間不在」という状況それ自体であり、池田はカール・G・ユングを参照しつつ、そうした状況こそ真の敵、現代の悪霊であるとさえ述べている。池田にとってはまさに、敵対勢力が「悪」なのでなく、自己を「善」、相手を「悪」として分断していく作用そのものこそ、真なる「悪」だと理解できよう。また、「人間不在」は「人間主義」の対極と考えられ、相手を「敵」として「定型化」して問答無用の対話拒否へと追いやるものと考えられるが、対話を可能にするためには、相手に「自己規律」を要求する前にまず自らに「自己規律」を課す——このことを池田は同年の提言で「一人ひとりが全存在をかけて自分自身をつくり替える（人間革命の謂です）ほどの覚悟と緊張、実存的決断を要」と主張している（池田 2002（1）：3 面）⁷。

以上のように、「他者」の痛みへの想像力と「自己規律」が連動しているとする池田の思想は、

⁶ テロへの報復攻撃としての空爆について、池田が同提言で述べている以下の一節は、無人機や AI 兵器の時代たる今日において再度注目すべきと思われる——「味方の人的損失が限りなくゼロに近いのに、相手には甚大な被害を与え、しかもその規模さえ定かでないというような状況が、人間の生き死にという根本事への不感症を亢進させ、魂の次元など、はるか遠くに置き去りにしてしまいはしないか」（池田 2002（1）：3 面）。

⁷ 2003 年および 2004 年の SGI 提言で池田はさらに、「自制心のかたち」を示す必要性、「他者への眼差し」に基づく自己規律を語る中で、同様の内容を再説している（池田 2003（上）：2～3 面）（池田 2004（上）：1～3 面）。

「行動準則」で語られている「相互依存」（すなわち縁起）に相当し、人間は縁次第で善にも悪にもなり得るという点で「すべては変化」（つまり固定的なものは何一つない）と表現されていると考えてよいであろう。

3. 「行動準則」の検討（2）：結びつきの一つの現れとしての矛盾・対立

次に、「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」とする池田が持つ対話観の検討に移ろう。本稿の冒頭で、池田が「対話こそ平和の王道」とあくまで主張する際、「いかなる冷笑を浴びよう」と述べていることに触れた。21世紀に入ってすでに四半世紀が過ぎつつある現在、つまり社会の分断、戦争と新たな軍事安全保障への傾斜、SNS上にあふれ返る誹謗中傷や「フェイクニュース」、果ては「ポスト・トゥルース」が語られる現代にあって、池田が長年懸念してきた言葉に対する「轻信」と「不信」の両極への振れ⁸ははるかに悪化しているように見える。特に昨今は、根拠の有無にかかわらず自らが信じたいものだけ信じ、異なる信条や価値観を持つ者はそれだけで「敵」と決めつけ、理性的に相手を説得しようとする対話など成り立たない「分極化」が甚だしくなっている。このような中で「対話こそ平和の王道」と主張し続けることは、以前にも増して冷笑の対象にされかねない。

だが筆者はかつて、対話に対して冷笑的であるのは、対話を予定調和的に丸く収まるものとイメージしているからではないか、という趣旨のことを論じた（山田 2010b）。池田の考える対話は、そうしたものからは程遠い。むしろ、対話とは「闘い」であるというのが池田の対話観であると考えられる。彼の言説からいくつか例を挙げれば、

「ソクラテスがそうであったように、言葉と言葉の撃ち合いが、果ては死をもたらすかもしれないほどの緊迫した状態さえ覚悟した、退くことを知らぬ徹底した対話」（池田 [1993b] 2008:176）

「もとより対話といっても、春風のようなものばかりではなく、時には火を吐くごとき言論のつぶてが、相手の傲り高ぶる心を撃つ場合もあります」（池田 [1993c] 2000:21）

「火花を散らすような出会いと対話の精神闘争を通じて、人間をひとつことに拘泥、拘束させているこだわりの結び目を、一つ一つ、丹念に解きほどいていく労作業」（池田 2005（上）：1面）

⁸ 言葉への轻信はイデオロギーや民族主義などへの狂信へとつながる一方、言葉への不信は「言論嫌い（ミソログス）」＝「人間嫌い（ミサントローポス）」に通じることを、池田は折に触れて論じてきた。ここでは（池田 1993a: 1面）（池田 [1993b] 2008:176-177）を参照。

等々、以上だけでも、池田の考える対話が仲良く穏やかに共感や相互理解や合意をもたらすようなイメージでないことが分かる。対話には、容易に解けない矛盾や対立が必然的に伴うということである。

では改めて、「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」とはいかなることか。2005 年提言には、過激主義、教条主義、人間主義等々と言っても「主義と主義の対峙といった漠たる対立があるわけでは決してなく、あくまでそれを体現した人間同士の、腹を割った一対一の対話こそ、原点であり実像」だとの言及がある（池田 2005（上）：1 面）。つまり、異なる考えや信念を持つ人間としての「他者」を相手にするのが対話であり、やはり池田の焦点は具体的な人間である。そして相手が「他者」である以上、容易に自分の意のままにならない。しかし、その「意のままにならない」という現実、あるいは相手から受ける抵抗や相手との間にある壁を意識するからこそ、「自」と「他」はリアリティを持った存在となる。つまり、他者との撃ち合いや関わり合いといった手応えを通じて、自らのアイデンティティを獲得することができる、というのが池田の主張であり（池田 2004（上）：1～3 面）、端的に「他者なくして自己なし」とも述べられている（池田 2003（上）：3 面）。こうした撃ち合いや関わり合いといった「闘い」こそ「結びつき」であると理解できる。ここでの「闘い」とは、相手を倒すことではなく果敢に「関わっていく」ことと言え、筆者なりに言い換えれば「切り結び」となるか⁹。このような「闘い」としての対話を手放さない限り、文字通り「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」と言うことができよう。

そして池田にとって、対話を手放すことこそ、このような「闘い」としての「結びつき」に耐えられず「易き」につこうとする人間の弱さの現れであり、彼の「人間主義の結構」で語られた「強靱な主体」の逆であると言えよう。池田はその例として、一方では、特定のイデオロギーなどを安易に絶対視して相手の痛みへの想像力を失い、自分の意のままにしようと欲する傾向性（仏法で言う「他化自在天」＝魔性）を論じ、他方では、リアルな他者と関わるという根気がいり苦痛さえ伴う営みを避け、葛藤やぶつかり合いを無しに済まそうとする現代のバーチャル化の風潮に言及している（池田 2004（上）：2 面）。いずれの場合も、失われているのは「他」と「自」との生きた関係である。ここで、2002 年の SGI 提言からの池田の言葉を引用してみよう（池田 2002（1）：3 面）。

「人間は『他者』を意識し、『他者』の眼差しの中でしか『自己』になりようがなく、その『自他』の魂の撃ち合いを通して人間は人間になっていく——人間が成熟していくプロセスとして、いわば常識であります。／このプロセスを欠けば、人間は、いつまでたってもわがままで自己陶醉の幼児性、発育不全を脱することができない。」

⁹ かつて筆者は、他者を打倒すべき「敵」ではなくむしろ必要な「対抗者」と捉える闘技的多元主義（agonistic pluralism）を検討する際、それが批判する熟議民主主義と実はそう違いのものではないのではないかと論じたことがある（山田 2007）。池田の「闘い」としての対話観は、まさに熟議民主主義と闘技的多元主義を架橋するものと考えられる。

ここで言う「魂の撃ち合い」こそ対話であるならば、その対話の道を閉ざしてしまえば、第1節で言及した池田の言う「人間主義」とは真逆となり、分断作用という「悪」に対して無防備となる。矛盾や対立もまた結びつきであるとする池田の「行動準則」は、先に述べた「他者なくして自己なし」という縁起観の表れであり、このような「闘い」としての対話や他者との関わり合いを避けては、人間は人間たり得ないということになる。

4. 「行動準則」の検討(3)：内なる制覇と漸進主義

さらに続けて、「行動準則」で語られている「内なる制覇に発する悪との戦い」への検討に移ろう。すでに論じたところから、「内なる制覇」とは「自己規律」につながり、「悪との戦い」とは善悪二元論に見られる「分断作用」の克服を意味し得る、と考えられよう。第2節で、相手に「自己規律」を要求する前にまず自らに「自己規律」を課すと論じたが、ここで、「制覇」すべき自己の内面について池田が語る際の1側面を見てみたい。それは、1992年と2009年のSGI提言で論じられた「抽象化の精神」の問題である。

「抽象化の精神」とは、池田がガブリエル・マルセルを援用して論じているものである。簡潔に述べるならば、戦争のように相手を「敵」として滅ぼさなければならぬ事態になった場合、相手が持つ個人的実在を一切捨象し、「コミュニスト」「反ファシスト」「ファシスト」等々の抽象概念へと変えてしまわなければならない（それによって、敵対する相手も生きた人格であることが容易に忘れられる）、ということである（池田1993a: 3面; 池田2009(上): 1面）。かつて政治哲学上でいわゆる「リベラル＝コミュニタリアン論争」が華々しかった1980年代から今世紀初頭にかけて、リベラリズムが前提とする「個人」が一切の属性を持たない抽象概念であると批判され、歴史的・社会的・文化的背景を持つコミュニティ（共同体）こそ人間の具体的なアイデンティティの基盤となる、という論点が見られた¹⁰。しかし、マルセル的視点を重視する池田の議論はそこにとどまらない。人々をアトム化し社会をバラバラに断片化させる行き過ぎた個人主義的リベラリズムも問題だが、しかし具体的なアイデンティティに見える「〇〇人」「〇〇民族」「〇〇主義者」「〇〇教徒」「〇〇派」等も実は、1人1人の具体的な顔を見えなくする抽象概念となり得るのである。しかも池田は、「抽象化の精神」が決して価値中立的なものではなく、抽象概念化された側の人々の価値を貶める決めつけを伴い、ルサンチマンへと容易に陥ることを指摘している（池田2009(上): 1面; cf. 山田2010a: 276）¹¹。この「抽象化の精神」こそ、池田にとっては、自分の意のままにならない他者に「敵」「悪」とレッテルを貼り、対話を拒否する、

¹⁰ さしあたり（藤原1993）を参照。この論争にはおびただしい論点が含まれていたが、それを検討するのは本稿の目的ではない。

¹¹ 池田は1993年のSGI提言では、マルセルと並んでウォルター・リップマンの「ステレオタイプ」に言及し、決めつけやレッテル貼りが不寛容さを生み対話を阻む様を論じている（池田1993a: 4面）。

人間の弱さの1つの元凶であると言えよう。

1993年のハーバード大学講演で池田は、人間の「差異へのこだわり」を釈尊の言葉を用いて「見がたき一本の矢」と表現したが（池田 [1993c] 2000:18-19）、「抽象化の精神」もまたそれに当てはまり、「自己規律」による「内なる制覇」を通じて乗り越えるべきものと考えられよう。「内なる制覇」を考える場合、すでに第2節で触れた、「悪」をもっぱら外部に求め、自らは「善」であるとする善悪二元論に再び立ち戻ってみよう。仮に相手に対するルサンチマンを意識しておらず、自分の言動が善意によるものと信じている場合であっても、池田は「人間の素朴な善意などというものは、自らの内なるエゴイズムとの徹底した対決がない限り、いつ支配欲に——それも、むき出しのそれではなく、イデオロギー的粉飾をほどこされたもっともらしい支配欲に転じてゆくか」しれたものではないと断じている（池田 1992a: 3面）。自分が「善」である以上、「善」を実現するには早い方がよく、そのためには力づくでも言うことをきかせよう——とする危険なあり方を、池田は「急進主義」として批判するが（cf. 池田 [1992b] 2000:111-112; 池田 [1993b] 2008:171-174）、ここでの「支配欲」につながると言ってよいであろう。ゆえに「内なる制覇」とは、善意の底に潜むエゴイズムの制覇、相手を意のままにしようとする支配欲の制覇、自ら「善」と考えるものを吟味しなおす内省・自制心、さらには、そのように自らの内面と向き合う勇気のなさの制覇、等を意味すると考えられる。それは、問答無用の暴力につながりかねない「急進主義」に対して、いかに相手との差異や溝——思想であれ民族であれ宗教であれアイデンティティであれ——が大きくとも、たとえ容易に理解や合意に達することができなくとも、対話を手放さないという意味で「漸進主義」と言えよう。

実際、対話が「闘い」であるとしても、それは言葉を通しての撃ち合いであり、非暴力による闘いである。しかも、自分が一方的に相手を説得しようとするのみならず、自分に足りないものを自覚して相手から学ぶのも対話である。暴力が渦巻く世界において対話より実力行使の方にリアリティがあるとされがちな中、池田は非暴力の闘士であったマハトマ・ガンジーの言葉「善いことというものは、カタツムリの速度で動くものである」をしばしば引用している（cf. 池田 [1992b] 2000:110）。これは文字通り「漸進主義」であり、池田にとって「内なる制覇」と「他者との対話」が人間として譲れないものであったとすれば、「漸進主義」への志向性は必然的なものであったと考えられよう。「急進主義」への誘惑に負けず「漸進主義」を貫く（＝対話を手放さない）とすれば、「矛盾、対立の内なる制覇に発する、悪との戦い」とは、やはり対話による分断作用（悪）との戦いだと結論できるだろう。

以上の議論を、いささか図式的に整理すれば、次のようになろう。

- 抽象化の精神——対話拒否——急進主義——分断作用（悪）
- 自己規律——1対1の対話——漸進主義——結びつき（矛盾・対立を含む）

5. 避けてはならぬ荆棘——結びにかえて

最後に、「行動準則」について論じ残した点に若干触れて本稿を閉じよう。以上述べてきた「悪との戦い」は、「大きな結びつきに至るまでの避けられぬ、避けてはならぬ荆棘である」と池田は語る。「荆棘」（いばらの道）である以上、それは容易ならざる道であり、にもかかわらず「避けてはならぬ」道であるというのである。しかもそれが目指すものが「大きな結びつき」であるならば、すぐに目に見える結果が出せるものではなく、あくまで忍耐強く「漸進主義」に徹しゆくことを池田は要請していると考えられる。

では、この「大きな結びつき」とは何であろうか。2007年のSGI提言では、池田自らが「行動準則」を再説する中で、それを「人類意識」と述べている（池田2007: 3面）。ここで言う「人類意識」とは、単に「人間みな同じ」という安易な心情次元の問題ではなく、「矛盾、対立の内なる制覇」の果てに得られる意識、先の引用で言われた「全存在をかけて自分自身をつくり替えるほどの覚悟と緊張、実存的決断」の果てに得られる意識であると言える。まさに「自己規律」という精神的緊張感を自らに課すと同時に、敵対する相手からも「善」なるものを引き出す可能性を信じ抜くことこそ、分断作用という「悪」を乗り越えて「大きな結びつき」（人類意識）へと至る道ということになり、自己の「内なる善」と他者の「外なる善」とを触発させる対話¹²こそ、いかに迂遠の道に見えようと、いかに困難を極めようと、避けてはならないいばらの道である。そして、相手の出方にかかわらず、まず自らがそうした「自己規律」に立脚して対話の回路を開いていく——このような、「大きな結びつき」を目指した行動を促す規範こそこの「行動準則」ということになると考えられる。

そうであるならば、「人間主義の行動準則」とは、現に今起きているさまざまな問題を解決する対症療法というよりも、池田自身が述べるように、もっと根源的次元から人間自身の変革（すなわち「人間革命」）を要請する抜本療法であると言ってよい。自他の（矛盾や対立を含む）開かれた対話を通じて、悪（分断）を善（結合）へと常に常に転じてゆく、あくなき挑戦を要請するものこそ、池田が提示した規範としての「行動準則」であるというのが、本稿の結論である。

[付記]

本稿は、2024年11月30日に創価大学で開催された周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム「対話による平和と発展」の分科会1「平和のための対話」での筆者の報告原稿に、加除修正を加えたものである。シンポジウム当日に有意義な質問をくださった参加者諸氏に感謝申し上げます。

¹² 池田はしばしば対話を「生命の触発」と呼ぶが、自己からも他者からも善なるものを引き出す営みとしての対話の作用を、「薫発」という言葉で表現することが多い。

文献一覧

- 池田大作 (1990) 「第 15 回『SGI の日』記念提言『希望の世紀へ 「民主」の凱歌』」、聖教新聞、1990 年 1 月 26 日、1～5 面。
- 池田大作 ([1991] 2000) 「ソフト・パワーの時代と哲学——新たな日米関係を開くために」(ハーバード大学講演)、『21 世紀文明と大乘仏教——海外諸大学での講演選集』所収、第三文明社。
- 池田大作 (1992a) 「第 17 回『SGI の日』記念提言『希望と共生のルネサンスを』」、聖教新聞、1992 年 1 月 26 日、1～5 面。
- 池田大作 ([1992b] 2000) 「不戦世界を目指して——ガンジー主義と現代」(ガンジー記念館講演)、『21 世紀文明と大乘仏教——海外諸大学での講演選集』所収、第三文明社。
- 池田大作 (1993a) 「第 18 回『SGI の日』記念提言『新世紀へヒューマニティーの旗』」、聖教新聞、1993 年 1 月 26 日、1～5 面。
- 池田大作 ([1993b] 2008) 「新しき統合原理を求めて」(クレアモント・マッケナ大学講演)、『「人間主義」の限りなき地平——海外諸大学での講演選集 II』所収、第三文明社。
- 池田大作 ([1993c] 2000) 「21 世紀文明と大乘仏教」(ハーバード大学講演)、『21 世紀文明と大乘仏教——海外諸大学での講演選集』所収、第三文明社。
- 池田大作 (2002) 「第 27 回『SGI の日』記念提言『人間主義——地球文明の夜明け』」(1～4)、聖教新聞、2002 年 1 月 26 日、1～3 面、同年 1 月 27 日、2～3 面、同年 1 月 28 日、3 面、同年 1 月 29 日、3 面。
- 池田大作 (2003) 「第 28 回『SGI の日』記念提言『時代精神の波 世界精神の光』」(上・下)、聖教新聞、2003 年 1 月 26 日、1～3 面、同年 1 月 27 日、2～3 面。
- 池田大作 (2004) 「第 29 回『SGI の日』記念提言『内なる精神革命の万波を』」(上・下)、聖教新聞、2004 年 1 月 26 日、1～3 面、同年 1 月 27 日、2～4 面。
- 池田大作 (2005) 「第 30 回『SGI の日』記念提言『世紀の空へ 人間主義の旗』」(上・下)、聖教新聞、2005 年 1 月 26 日、1～5 面、同年 1 月 27 日、2～4 面。
- 池田大作 (2007) 「第 32 回『SGI の日』記念提言『生命の変革 地球平和への道標』」(上・下)、聖教新聞、2007 年 1 月 26 日、1～4 面、同年 1 月 27 日、2～4 面。
- 池田大作 (2009) 「第 34 回『SGI の日』記念提言『人道的競争へ 新たな潮流』」(上・下)、聖教新聞、2009 年 1 月 26 日、1～5 面、同年 1 月 27 日、2～5 面。
- 藤原保信 (1993) 『自由主義の再検討』岩波新書。
- 山田竜作 (2007) 「包摂／排除をめぐる現代デモクラシー理論——『闘技』モデルと『熟議』モデルのあいだ」、日本政治学会編『年報政治学』2007-I。
- 山田竜作 (2010a) 「グローバル・シティズンシップの可能性——地球時代の『市民性』をめぐって」、藤原孝・山田竜作編『シティズンシップ論の射程』所収、日本経済評論社。

山田竜作（2010b）「現代社会における熟議／対話の重要性」、田村哲樹編『政治の発見5 語る
——熟議／対話の政治学』所収、風行社。

Young, I.M. (2000). *Inclusion and democracy*. New York: Oxford University Press.